

2024年3月13日発行
日本比較文化学会関東支部

2023年度第3号のレター発行となります。本号では、2024年3月10日(日)に富山短期大学にて開催されました「第61回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

◆第61回 関東支部例会 ご報告◆

2024年3月10日(日)、富山短期大学において第61回関東支部例会が開催されました。当日は5名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部 支部長 高橋 強 (東海大学)

◆研究発表:

1. 1.スポーツ英語習得:プロジェクト型学習とランゲージングの観点から

高橋 強

東海大学 准教授

今回の発表は、前回の CLIL 体育に引き続き、スポーツ英語習得に必要な効果的な方法を多面的なアプローチから研究したものを述べることにする。その一つとしてプロジェクト型学習の観点から考察を加え、ランゲージング (languaging) という手法で主体的で深い学びへつなげるために言葉に対する気づきを促進することを目的とした指導法について発表するものとする。

はじめにプロジェクト型学習で、スポーツを専攻としている学生たちにスポーツ英語を習得させるためには、大学英語教育において、Project-based English Program (PEP) 「プロジェクト型英語教育プログラム」を実践することである。これはスポーツ英語に対しての関心を高める一方で、学生が各クラブ活動に所属しているので、そのクラブの特徴を英語で発表してもらうことにより少なくとも、自分のクラブについて英語で表現できるように構成されたプロジェクトである。山中 (2021) は「日本の伝統的な英語教育では知識が知識として統合しておらず、真の意味で獲得されていない。」と述べている。これを受けてプロジェクト型で授業を進めれば、グループやプレゼンテーションによる発表により、たとえ不十分で拙い英語だとしても必然的に英語を話さざるを得ない環境となる。そして今ある英語力に着目し、平易な英語を使い、i-1 という英語力で十分なので、堂々と英語でのプレゼンテーションに挑む態度を涵養することが重要である。そうすることで、学生たちも自信を持ち、自分ができる範囲を拡大していくことができるのである。

次にランゲージング (languageing) であるが、鈴木 (2022) によると「言葉で表現することを通して、自分の理解を形成し、再構築していくことである。」と述べている。これはスポーツ英語学習にとどまらず、グループ内で話し合うことにより、各スポーツの文化的な側面までも含み情報や知識を形成し、再構築することができるまで含むのである。これにより、各スポーツ競技について知識を深め、改善点などにつなげることでより深い学びを再構築できるという利点がある。また各自で責任感を持ち主体的に協力して協同学習できることも重要な点である。授業の最後に振り返りとして、学んだスポーツ英語表現をノートに書いて提出させ、教員がチェックして次回の授業で返却するといった手法を取り、学んだ英語表現を使い、平易な英語で短文を書いてもらい、それをグループ内、またはプレゼンテーションすることで知識の定着を図ることができるのである。

上記したように、プロジェクト型学習とランゲージングを授業に取り入れ、効果的に授業を実践することと学生の英語の能力を $i+1$ ではなく $i-1$ のレベルの英語を使用し、最大限に発揮させることが出来るのである。これらのメソッドを使い実際の授業で実践することができたことは大変意義のあることであり、学生の懸命に取り組む姿を垣間見ることができたことは望外の喜びであったことは間違いない。

2. 高等学校応援団生徒のエールの発声技法が与える心理効果について **—発声に対する感情評価分析から—**

岩崎 智史

東京未来大学 講師

杉本 雅彦

東京未来大学 教授

金塚 基

東京未来大学 准教授

日本の小・中学校および高等学校の教育課程においては、集団的な応援活動が実施されるプログラムが多くみられ、児童・生徒はそれらの機会に同級生や仲間、あるいはその家族を巻き込んだ応援活動がなされてきた。本研究では、高等学校の応援団における重要な構成要素である発声に着目し、発声音により感情が喚起されるかどうかを検討した。実験は、応援団員と非応援団員とのエールの発声音を収録し、被験者にヘッドフォンで視聴してもらい、多面的感情状態尺度により調査を行った。分析は、応援団員の習熟度を独立変数、下位尺度を従属変数とした分散分析を行った。その結果、応援団員、非応援団員ともに音声のエールによる活動的快感情が喚起される可能性が示唆され、特に応援団員では練習効果によって、より強く活動的快感情を喚起することが明らかになった。

3. Theravada Buddhist Virtues in Karate Life: Generosity of Sri Lankan Karate Practitioners

マヴィークムブラ・カルロヴァー・ペトラ

パラツキー大学助教

There are many studies on relation of Mahayana Buddhism and Asian martial arts starting from Nitobe Inazo's book Bushido. The Soul of Japan (1908). However, there is almost no research on Theravada Buddhism and martial arts. Therefore, this paper focuses on Theravada Buddhism in karate life of Sri Lankan karate practitioners and examines the one of the most important virtues - generosity (dāna, 布施). Theravada Buddhist believe dāna brings merit (puñña, 功

徳・くどく). This is a crucial concept because, in Theravada Buddhism, nibbāna (涅槃) is hardly accessible to laymen, so they focus on the accumulation of merit which can bring better rebirth. It is also believed that giving helps get rid of craving which is necessary for attaining nibbāna.

Generosity in Sri Lankan Theravada Buddhism was discussed by Gombrich and by Naindu, but they mainly dealt with alms giving to the community of monks (sanghika dāna). They also mentioned about the transferring the merit from giving to deceased person (mataka dāna). However, generosity in Sri Lankan society is wider. Therefore, this research aims to examine how this practice of dāna penetrates karate life of Sri Lankan karate practitioners. First, it will look at giving to the monks and temple. Second, it will clarify donations within karate organization. Third, it will focus on giving to the wider society. Fourth, it will touch upon the practice of merit transference from dāna. Fifth, it will discuss karate instructors' reasons for dāna. For this purpose, semi-structured interviews with 18 Sri Lankan Buddhist karate instructors were conducted during 2022-2024.

◆閉会の挨拶: 関東支部 支部長 高橋 強 (東海大学)